



東日本大震災 津波被災地(岩手県)視察記録

平成 23 年 6 月 17 日～18 日

H23. 6. 30

株式会社 ディーワーク

はじめに：記録集作成に当たって

3月11日大震災から、4ヶ月が過ぎようとしている現在、未曾有の大地震・大津波であったにせよ、復旧・復興の足音は、阪神淡路大震災の対応過程に比べると弱いように感じる。確かに強大な津波浸水による甚大な被災であり、さらに原発対応に追われる想定外の事態が加わったことが、震災対応・復興活動の足並みを乱しているのだろうが、傷ついた被災地を迅速かつ細やかに治癒すること（地域に暮らす人々の過去から将来に至る空間的・社会的な地域文脈を継承・再生すること）が復興の第一歩である。

我々は、地域地区や街区の空間構成を計画し設計する専門家である。現地の地図や写真をみただけで、その空間構造を頭の中で想像し理解する職人であるが、同時に現場感覚を重視することの大事さを判っている職業人でもある。幾多の映像や写真も、現地を歩く体験にはおよばない。地震が多発する日本では、被災状況を知ること、災害構造を理解することを、もっと都市計画・建築設計の基本事項として取り組む必要があるのだろう。百年千年に一度のことだから、専門外のことだから、といえない三陸地域の惨状を聞くたびに、被災地の現状・現場を体験しておきたいと思った。

本冊子は、6月17日（金）～18日（土）の2日間に実施した東日本大震災・津波被災地（岩手県）8市町村の視察記録である。スタッフの多くは30歳代であり、大震災被災地を歩いたのは初めての体験であった。現地の凄まじい被災状況、言葉も感情も無くなるような現場感覚、それらへの率直な思いを個々に表現・発言することが大切であると感じ、記録集として編集したのが本冊子である。20年後 30年後に再び眼を通したとき、何を感じ思うかが歴史文化であり、その動作の蓄積が、わが国の防災文化を育むコモンセンスになると信じた未来帳でもある。

_____（藤沢）

追記：震災復興を考えるためには、①今回の地震や津波そのものの特性、②対象となる地域地区の特性、③地震発生から現在までの地域地区の災害構造の解説、この3つが必要となる。地域地区の具体的な復興計画立案には、これに加えて、想定される幾つかの災害構造を復興すべき都市・地域地区の中で再現したり想像する検討が必要となる。

現在の復興計画の取組を俯瞰すると、「減災」の考え方が浸透しつつある。これは、地震津波を物理的に制御する従来の「防災」の考え方から脱却し、予想を超える津波が来ようとも、津波から「逃げる」ことを基本にすることで、津波被害を最小限に抑えようとする、ハードとソフトが混在する津波対応型都市計画の考え方である。この減災を具体的に地域地区に当てはめた場合に、津波避難ビル・津波避難ビル住宅などの「空間構成ツール」の検討が重要であり、この項目については、本冊子の別バージョン「三陸地域の復旧・復興に係る空間構成ツール提案」として、作成している。

< 目 次 >

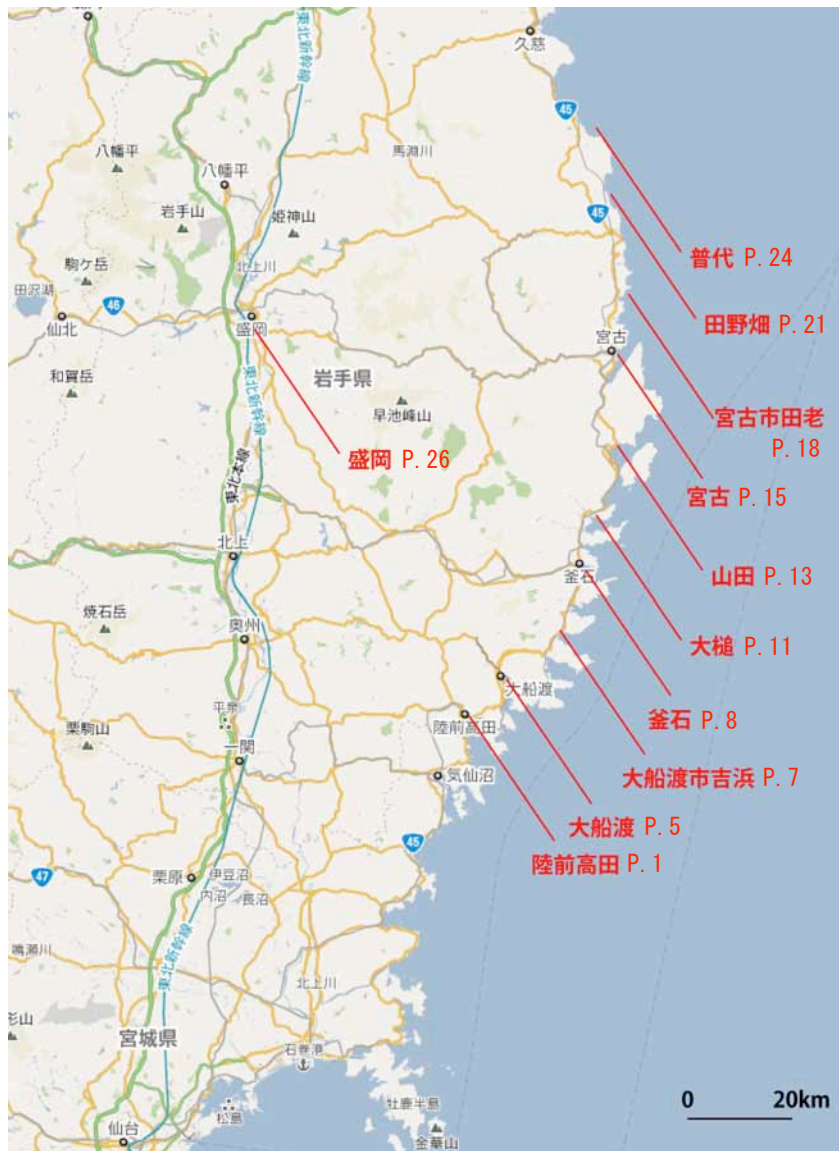
6月17日

陸前高田市	1
大船渡市港海岸	5
大船渡市吉浜	7
釜石市	8
大槌町	11
山田町	13
宮古市	15

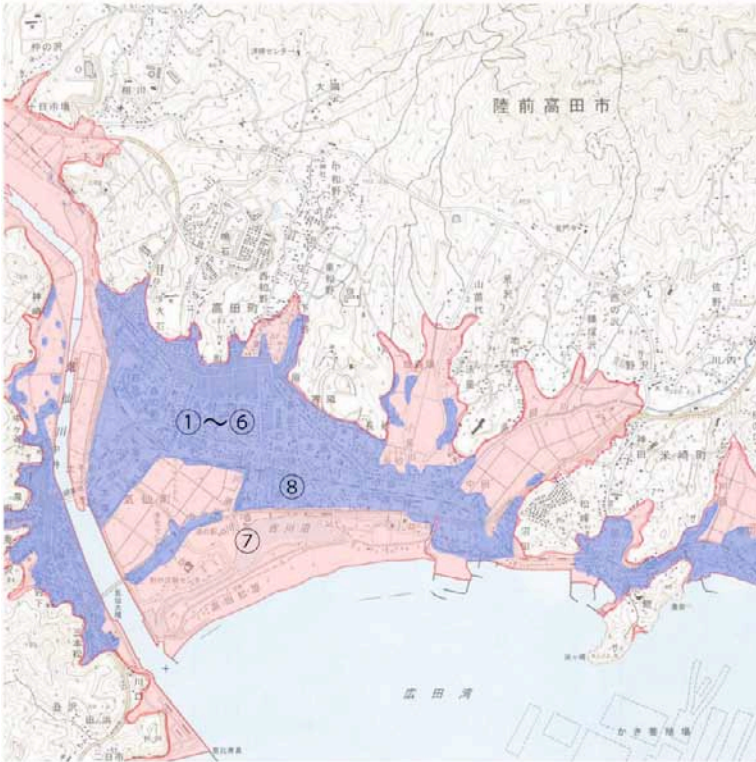
6月18日

宮古市田老地区	18
田野畑村島越	21
田野畑村平井賀	23
普代村太田名部・宇留部	24
盛岡	26

全体を通じての感想・提案等	28
---------------	----



12:15～12:50 [陸前高田市]



図中の数字は写真番号
日本地理学会作成 赤：浸水地域 青：建物被害が甚大な地域

[陸前高田市の概要]

被災前人口：23,302人
被災前高齢化率：34.2%
就業人口別構成：
第1次産業 16%
第2次産業 32%
第3次産業 52%

[被害状況：H23.6.30現在]

津波高さ：15.8m（痕跡高／市民体育館付近／東京海洋大岡安教授推定）
浸水面積：13 km²（国土地理院）
人的被害（岩手県発表）：
死者：1524人 行方不明者：565人
住宅被害（総務省消防庁発表）：
全壊：3669戸 半壊：1006戸
一部損壊：176戸

[参考：陸前高田市の過去の被災状況]

- 明治三陸地震（1896）：波高：3.45m
死者：42人 流失倒壊：36戸（以上気仙町）
- 昭和三陸地震（1933）：波高：3.85m
死者：32人 流失倒壊：102戸（以上長部地区）

東北新幹線一ノ関駅にて、三陸鉄道担当者とは合流。2号車バスガイド金子氏の案内で、19号線から三陸に向かう。正午過ぎに陸前高田市役所前に到着。津波の高さも地盤沈下も最も激しかった地域（計画津波高5.5m＝防潮堤高さ）。道路や堤防など都市を構成する基盤の存在が何となく判るため、ここが都市であったことは理解できるが、大勢の人々による数十年以上の日々の建築行為・生活行動の集積が、1度の津波で消滅するあり様に慄然とする。躯体だけのRC建築、瓦礫が混じり合っただけの状況、解体を示す印や自動車の残骸。45号線気仙大橋と県道姉齒橋の落橋など、強固な防波堤・防潮堤の破壊も想定外だが、建築などの上物が存在しない都市の光景は異常であり、此の世とは思えない景色を、理解することを拒否したくなる。そんな小さな防衛本能をかきたてる巨大な惨状を見ることになった。

このような光景は、言葉も感情も無くなるようで、こんな空間体験は初めてなのだろう。酒田大火も翌朝には生々しい現場を歩いた。宮城県沖大震災も調査した。阪神淡路大震災も被災地を相当歩いた。幼い頃には何度も台風での体育館避難を体験している。しかし、自然そのものの威力をはっきりと感じ、圧倒的な自然の力を思い知ったのは、60年近く生きていて初めてのことだ。一瞬の間に、長い時を重ねて築いてきた都市空間が無くなり、社会ストックが壊滅するということが、あり得るということを初めて、脳というより身体が理解した。しかし復旧の手掛かりは見え、この地の復興を実現することは大変と感じた。

—————（藤沢）

国道で市街地に向かうと、とある場所から突然津波被害の実態が始まる。そこまでの緑深い美しく穏やかな風景とのギャップもあり、衝撃をうける。津波によって建物から電柱やガードレール、おそらくあったであろう樹木や畑や田んぼといった地上にあったあらゆるものが流されてしまっている。

市役所から徒歩で視察開始。鳥の声ばかりが耳につく。そこら中に散乱し泥をかぶった生活用品が、そこに僕らと同じありふれた日常があったことをリアルに想起させ、なんともいえない気持ちがこみあげてくる。陸前高田は、高さ12mの津波に襲われた。市役所建物の3階、集合住宅は4階までその爪跡が残る。木造建物は、基礎・土台から上が流されている。鉄骨建物は外壁の一部、ものによっては大部分が剥がされ構造体があらわになっている。RC造の建物は、躯体が残っているもののサッシが全て破られ、漂流物が建物内に入り込み内装を破壊している。躯体もよくみると漂流物が激突してできたとみられる欠けが散見され、損傷を受けており、躯体を再利用するのであれば補修や補強が必要だろう。

RC造の建物の多くは、躯体だけはどうにか残っている状態だが、これらをどう扱うかは復興にあたってのひとつのテーマになるだろう。地上の構造物のほとんどが失われた中で残った建築物を再利用していくことは、土地の記憶を紡いでいくという意味で大事なテーマになると思う。

復旧作業の進行状況は、がれきが、道路部分からは取り除かれ車両の通行が可能になっている。ぐしゃぐしゃになった車、木材、鉄くずが仕分けされ街の中のある場所に集められ巨大な山となっている。この日は小雨が降ったりやんだりの天気で砂埃が舞うことなく視察の環境としては丁度よかったが、晴れていれば、砂埃が舞い、雨が降れば排水溝が機能していないため、すぐに水が道路にあふれぬかるみになる。地盤沈下が起こっていることもあり、水がなかなか引かない。復旧活動にあたり、やっかいな問題となっている。

————— (岡本)



①陸前高田市役所 (撮影：伊藤)

建物4階まで浸水。津波襲来時まで防災無線で避難を呼びかけた女性職員等、多数の市役所職員が亡くなっている



②市役所玄関口 (撮影：古林)



③市役所周辺 RCの柱が根こそぎ津波に持っていかれ、鉄筋のみが残る (撮影：中川)



④マイヤ高田店(スーパー) 鉄骨がむき出しになっている (撮影：中川)

東北新幹線一ノ関駅で下車。三陸鉄道のバスで最初の視察地陸前高田に向かう（10：30）。車中からなので実際のところはわからないが、内陸部の地震被害は見られない。途中、工事関係車両とすれ違う。陸前矢作駅手前から津波の浸水区域に入る（12：30）。曲がったガードレール、木の瓦礫、木造住宅の基礎が残る。テレビの映像で見ていた光景。見ていた通りだが全く違う光景。言葉がない。国道 343 号線の終わり、340 号線との T 字路。高田街道（340 号線）は一般車両、工事車両で混雑していた。信号の無い T 字路を警察官が交通誘導している。被災直後、沿岸部の道路は流され、通行できず縦貫道が物資の輸送に役立ったとのことであった。陸前高田の市役所前で下車。鉄骨 3 階建てのスーパーは 3 階部分まで外壁が壊れている。RC 建物も構造壁や柱に漂流物がぶつかり損壊している。すでに解体された建物も多いようだった。市役所の裏手にある NTT の建物は 1 階の開口部がベニヤで養生されているが再使用可能に見えた。

—————（前田）

最初に目にした陸前高田市は瓦礫の撤去が進んでいました。越前高田市役所前でバスを降りると、道路と躯体だけの RC 建築が点在するだけで、建物の基礎や瓦礫が海岸まで続く光景が広がっています。人の暮らしていた気配が少しも感じられず、「TOKYO NOBODY」だったか、誰もいない東京の街を写した写真集、そんな異様な感じがします。何もない。

陸前高田市から海岸沿いをバスで北上したことで、少し、自然地形を体験できました。高台移転となる場所が少ないこと、斜面勾配もさまざま、ほんの少しの高低差で被害状況が全く違ったこと、微高地が多く残っているとも聞きました。

—————（伊藤）



⑤建物状況：大船渡警察署高田幹部交番宿舎 低層でも RC 建物は残っているが、屋上まで浸水（撮影：伊藤）



⑥周辺風景 四方どちらを見ても見渡す限り瓦礫のま
ちが広がる（撮影：伊藤）



⑦高田松原の一本松 手前は海とつながった池。松林は
根こそぎ壊滅（撮影：伊藤）



⑧海岸付近の状況（撮影：伊藤）

バスを降りると、見渡す限り土色の風景が広がっていた。早朝の新幹線に乗り込み、一関からのバスに一時間ほど揺られ、眠い目をこすりながら歩いた最初の街、高田の中心市街地があった場所である。

想像を絶する光景と言え、言い過ぎかもしれない。新聞や雑誌の報道で被災地の写真は数多く目にしていたし、何よりも昼間に起こった地震だったため、即座に被災地上空に飛来したヘリコプターからの中継による、リアルタイムの津波映像は記憶に新しい。また、Youtube を始めとするインターネット動画サイトでは、被災者が捉えた津波襲来時の衝撃的な映像を数多く目にする事ができた。高田をはじめ、10m を越える津波に襲われた沿岸市町村が、わずかな RC 造の建物を残して壊滅的な被害を受けたことは、様々なメディアを通して知っていた。全てが洗い流された街の航空写真は、原爆や大空襲を受けた街のようであり、陰惨な印象を持っていた。

降り立った高田の街は、瓦礫の整理が進んでおり、残された少数の建築物を除いて、街があった頃の面影を留めていなかった。予想がついていたはずの光景ではあるが、感じたのは恐怖でも悲しみでもなかった。これは何なのだろうという、理解の範疇を越えた戸惑いだった。どうしようもないのではないか、どうしようもなかったのではないか、という無力感でもあった。写真や映像のようにフレームで切り取られたワンシーンではなく、360° 見渡す限り、遠くの山並みまで続く土色の風景には、それだけの衝撃があった。

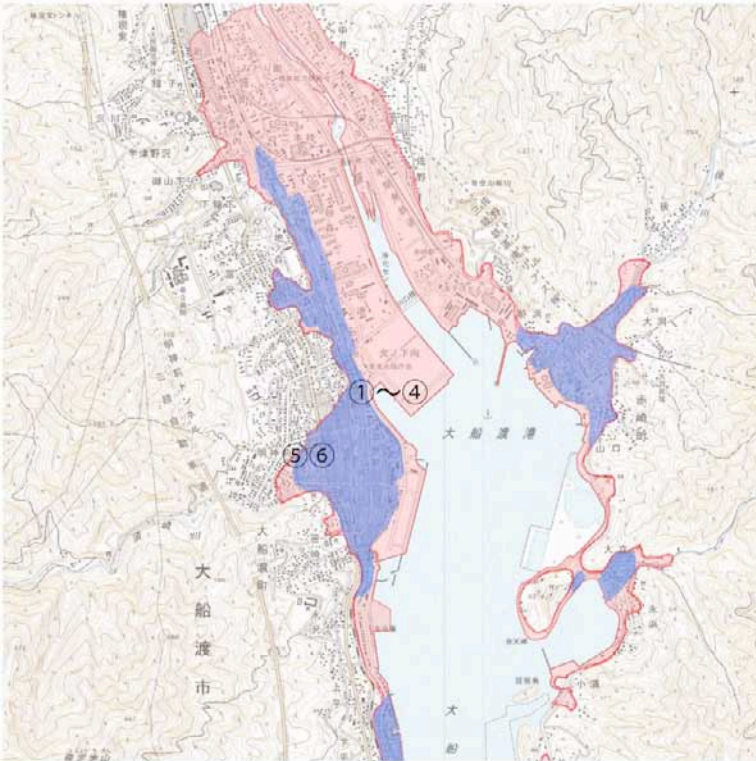
種明かしをしてみれば、大規模災害の被災地に入った経験が私には無かった。阪神大震災の際には、親類も被災していたが、神戸や芦屋を訪れたのは震災後数年経ってからだった。それでも、見慣れた街の風景の変化に驚いたものだが、今回の大震災はちょっとスケールが違うな、という印象は当初から抱いていた。実際のところ、1959 年の伊勢湾台風の死者・行方不明者が 5 千人、1995 年の阪神大震災が 6 千 4 百人であったことからしても、2 万 3 千人以上が亡くなり、又は行方不明となっている今回の大震災が、戦後最大の自然災害である事は間違いない。

最上階まで浸水した陸前高田市役所は、全ての窓が破壊され、濁流に汚れたカーテンだけが幽霊のように垂れ下がっていた。普段なら恐怖を感じる光景だが、所在なげにぼつんと佇むかつての市政の拠点、現実味を失っていた。市役所に隣接する市民会館は、RC 造であるにもかかわらず、ホールと思しき大空間を中心に大きく破壊していた。周辺には多くの低層建物があったと思われるが、基礎を残して全て流失。アスファルトの道路のみが縦横無尽に延びている。瓦礫の多くは撤去されていたが、よく見ればそこかしこに生活雑貨が埃っぽい土に半分埋まる形で残っており、ふと目にした文庫本が子供向けに直されたデュマの三銃士であったりして、持ち主が健在であつたら良いと心から思う。

東京に帰って被災地の浸水地域の地図を手にとってみると、岩手県に特有の被害状況が分かってくる。リアス式の三陸海岸では、低地の面積が少ないため、「見渡す限り浸水した」ように見えた陸前高田市でさえ、浸水したのは海岸から 1km 以内に収まってしまふ。仙台平野のように、海岸から 3km も 4km も海水が浸入したような場所は少ない。奥深くまで浸水したのは、河川のある場所等、谷地になっている部分が大半である。それでも逃げ切れなかった方が多かった。

————— (古林)

13:15～13:30 [大船渡市港海岸]



図中の数字は写真番号
日本地理学会作成 赤:浸水地域 青:建物被害が甚大な地域

[大船渡市の概要]

被災前人口：40738 人
被災前高齢化率：30.9%
就業人口別構成：
第1次産業 11%
第2次産業 30%
第3次産業 59%

[被害状況：H23.6.30 現在]

津波高さ：9.5m
(痕跡高/東大都司準教授調査)
浸水面積：8 km² (国土地理院)
人的被害 (岩手県発表)：
死者：325 人 行方不明者：127 人
住宅被害 (総務省消防庁発表)：
全半壊：3629 戸
一部損壊：調査中

[参考：大船渡市の過去の被災状況]

- 明治三陸 (1896)：死者：97 (大船渡町) 人 流失倒壊：67 戸
- 昭和三陸地震 (1933)：流失倒壊：3 戸

・岩手縣大船渡町笹崎 天然の良灣を控へ目下工事中の港灣復舊事業は昭和九年度中完成の見込にて、三千●●の船舶は直に岸壁に繫船し得るものにして、昭和九年八月國有鐵道大船渡船の開通と相俟つて、海陸交通の要衝をなす。昭和八年津浪は護岸及工事中の繫船岸●に依り其の勢を減殺され、被害の大部分は浸水の程度なりしも、市街地の故を以て相當の被害を受けたり。将来●港の完成、護岸の整理等に依りて、波力は更に減殺せらる可きを以て、現地に於て復興事業を施行せんとするものなり。新驛と海岸を連絡する幅員 11 米道路より、●港を経て鐵道に連る幅員 5.5 米及至 12.0 米の道路を街路復舊事業として●強新設し、之に依りて街●を●●す、その延長 983.8 米なり。

内務大臣官房都市計画課『三陸津浪に因る被害町村の復興計画報告』(1934 年)

45 号線にて陸中海岸随一の風光明媚といわれる大船渡へ向かう。山が迫る谷筋深くまで浸水した市内中心部を巡り、奥地まで来た津波被害の惨状を眺めながら、小川沿いの戸建て玄関先に乗り上げた大きな船の付近にて 1 時過ぎに下車。直ぐ近くの山並みを走る三陸自動車道・高架橋のスカイラインが、空にとけ込んでいる背景をみると、市街地の低さを実感する。気象庁発表での津波が最も高かった海岸 (計画津波高=防潮堤 3.4m、確認された津波高 11.8m)。初日視察地の計画津波高 (明治三陸、昭和三陸、チリ津波の設定値) は概ね低かったが、大船渡湾口防波堤が老朽化したためか、近年完成した釜石湾口防波堤の減衰効果に比べ、盛川を 4 km 津波が遡上したように市街地浸水被害を防げなかった。

————— (藤沢)

大船渡市は、陸前高田市ほど復旧作業が進んでおらず、多くの瓦礫の山や潰れた車両、ボロボロに崩れた建物が散在し、流出したサンマによる腐敗臭など、生々しさが残っています。市街は起伏の大きな谷筋に広がり、防潮堤を壊滅して押し寄せた津波は、川沿い深く盛駅手前まで達したそうです。わずかな高低差で大きな被害を免れた建物が残り、住民やボランティアの人々が復旧作業をしていて、デジカメを構えて写真を

撮るのがためられます。漢方用の鮑や牡蠣の養殖、昆布などの漁業と、観光の街として発展し、近年は釜石・宮古・久慈とともに観光拠点とするための大型船を入れる構想が進んでいたと聞きました。

————— (伊藤)

陸前高田が海に対して間口が広く展開しているのと違い、大船渡は海から奥に細長く市街地が発達している。巨大なタグボートが残された場所から徒歩で視察。津波の到達した場所は、陸前高田同様の被害を受けている。中心を流れる川から山へ向かって高低差があり、ある高さ以上にはほとんど被害のない建物が残る。それが元のまちの姿を想像させるため余計に被害の甚大さ津波の猛猛さが実感された。Jリーガー小笠原の出身地であり、本人が各避難所をまわり住人を励ましたという。こういうときに地元出身者が外で頑張っている姿をみるのは非常に励まされることだろうと思う。

————— (岡本)



①～④海岸付近の風景 道路を除いてはがれきの撤去が進んでいない (撮影：①②伊藤 ③④中川)



⑤⑥住宅地に流れ着いたままの船舶 わずかな高さの差で背後の民家は健在 (撮影：⑤伊藤 ⑥古林)

洲崎川の商人橋付近で下車。漁船が道路に乗り上げそのままの状態。浸水しても残っている木造住宅がまだ見受けられる。取り壊すのか残すのか決断は容易ではないだろう。川は瓦礫が多いが水はきれい。元々きれいなのか、生活排水が少なくなったためか。先ほど通ってきた縦貫道が山と山の間にかかっている。

————— (前田)

再びバスに乗り込み、北上する。ときおり波打つ路面が、水没したところを応急処置で迂回しながら続く。どこまで行っても変わらない茫漠とした被災地の光景である。朝からの眠気がいつまで経っても晴れなかったこともあり、本当に別の街を見ているのか分からないような、悪夢を見ているような気分になる。

————— (古林)

14:20 【大船渡市吉浜】



吉浜 (撮影：伊藤)

午後2時半頃に吉浜を通過する。吉浜湾（計画津波高 14.3m、防潮堤 7.2m）にも防潮堤以上の津波が襲い浸水被害は他と同程度あったが、明治の高台集団移転の継承により、生命も財産も他地域に比べ軽微。過去の教訓を活かした、この地のまちづくりをしっかりと確認しておきたい。

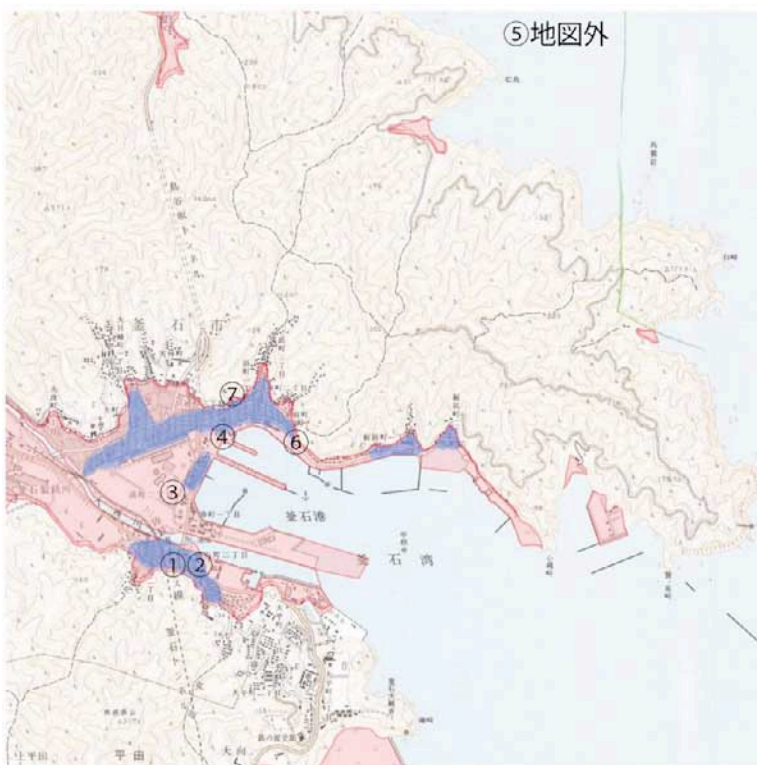
————— (藤沢)

釜石市に向かう途中、吉浜湾を通過しました。明治三陸の教訓から人家を建設しないラインを設定し、守り続けてきたため、他の地域に比べ被害が軽かった街です。起伏の大きい三陸は平場が少なく、そうした過去の震災からの教訓も時間が経つとともに薄れ、平場を求めて海へと宅地化が進んでいったところが少ないそうです。その先の唐丹は全滅だそうです。

————— (伊藤)

平地は田畑、住居は斜面地にあり人的被害はなかったとのこと。小さな湾の村は平地に家屋を建てるのが出来ないため斜面に家を建てる他ないことが被害を少なくしているとのこと。

————— (前田)



図中の数字は写真番号
日本地理学会作成 赤:浸水地域 青:建物被害が甚大な地域

【釜石市の概要】

被災前人口：39,578人
被災前高齢化率：35.0%
就業人口別構成：
第1次産業 9%
第2次産業 30%
第3次産業 61%

【被害状況：H23.6.30現在】

津波高さ：9.3m（痕跡高／気象庁発表）
16.4m（浸水高／釜石市両石／港湾空港技術研究所調査）
浸水面積：7km²（国土地理院）
人的被害（岩手県発表）：
死者：870人 行方不明者：361人
住宅被害（総務省消防庁発表）：
全壊：3188戸 半壊：535戸
一部損壊：120戸

【参考：釜石市の過去の被災状況】

■明治三陸地震（1896）：波高：7.9m
死者：5000人 流失倒壊：615戸
■昭和三陸地震（1933）：波高：4.13m
死者：1人

3号線沿いの釜石ラグビー場や、鮭を抱いた釜石大観音の姿に癒されながら、3時には釜石港付近に到着。災害は忘れた頃にやってくる（寺田寅彦）。しかし、歴史としては判っていても、実体験として意識できる時間軸は精々20年程度であるようだ。流行が20年で繰り返すのは忘れるからであり、忘れることが生きる秘訣のような近代に我々は生きている。過去の地震津波でも同じ地域、同じ場所に波がきた（計画津波高＝防潮堤4m、津波高9m）と聞く。吉浜や普代のように津波到達地帯を建築制限するまちもあれば、時間の経過で低地帯を市街化するまちも出てくる。そうなるソフト対策が重要。釜石の防災教育は、マニュアルではなく「状況に応じて自分たちで判断・行動すること」を訓練していたため、津波回避エリアの指定避難場所を危険と判断、第2避難場所に着くも危険と感じ、第3の高台へ避難。第2まで波は来たため、こうした行動で3千人の小中学生が助かった（他市では真逆の誘導被災例もある）。

—————（藤沢）



① 浸水して廃車となった乗用車が多数置かれている
（撮影：伊藤）



② 市街地には浸水した無人の建物が多く残る
（撮影：中川）

新日鉄釜石の街。海からベルトコンベアが行き来しています。市街には浸水し、解体OKと印のついた建物が多く残り、瓦礫の分別・処理もこれからという状況です。作業している什器もみられますが長い間この状態が続いているように思えるような様子です。釜石市が指定する津波被災ビルである市営釜石ビルをバスが通り過ぎました。3階まで浸水したようですが、避難場所としての機能は果たしていたと聞きます。それにしても、高台まで距離があり、車でないと移動できないような気がします。徒歩で逃げられることが基本だと思いますが、避難時間と避難距離、避難人口など、しっかりした避難計画が必要だと感じました。

————— (伊藤)

1200億円、20年間をかけてつくりあげた防潮堤が決壊。被災から3ヶ月でようやく道路部分のがれきを撤去した段階。陸前高田、大船渡と比べると建物が残っているようにみえるが、1 2階部分は一度浸水しており、ほとんど解体を余儀なくされているくらいの被害を受けている。建物が残っているのは、防潮堤により津波の威力が多少弱められたことによるものだろうか。更地になっていない分、復旧作業が難航しているようにもみえた。

————— (岡本)



③海際の工場 (撮影：伊藤)



④市営釜石ビル 昭和57年建築 8階建 3階までは事務所等、上階は市営住宅(40戸)。釜石市の指定する津波避難ビル2棟のうちの1棟であり、実際に津波時に避難された方もいる(浜町1丁目1-1) (撮影：伊藤)



⑤雇用促進住宅片岸宿舎 5階建ての2階まで浸水跡が見られるが、躯体は損傷軽微(その後、全棟取り壊しが決定している：6/24に取り壊しの入札公告)。市北端に位置する。(釜石市片岸) (撮影：伊藤)



⑥ 防波堤を大型船が貫通 (撮影：中川)



⑦ わずか数mの差が明暗を分けた (撮影：中川)

(唐丹湾小白浜) 防潮堤を乗り越え津波の被害が出ている。若干の高低で被害の状況が全く違う。津波が来ない高さであれば被害がない。話は単純であるが、ガイドの三浦さんもおっしゃる通り天国と地獄の差である。道沿いに小規模な仮設住宅が散見される。作りはいろいろ。

(釜石魚市場付近) コンクリートの建物は躯体自体は残っているが、窓は枠ごと折れ曲がり、漂流物でコンクリートの壁が傷付いている。RCの建物は再使用可能な物が多いのではと思った。漂流物の被害がなければ損壊も小規模になるのでは。現地に来る前は津波に対して建築物が出来ることは何もない、土木の領域での対応のみと思っていた。最低限の財産の保存は可能だと思った。躯体が残っていれば、内外装復旧し生活、仕事が再開できる。

————— (前田)

政府の復興委員会の提唱する津波避難タワーや、以前からあった津波避難ビル等に逃げる案があるが、周辺の市街地が津波の中、大火に飲み込まれたら、どうになってしまうのだろうか？

しかし、釜石市の港のすぐ脇に建つ津波避難ビルとなっている市営住宅は、津波の際に機能したと聞いている。現地で見れば、特に変哲のない市営住宅の建物だったが、とっさに上に上がれる場所を確保しておくことの重要性を感じる。

————— (古林)



図中の数字は写真番号
日本地理学会作成 赤:浸水地域 青:建物被害が甚大な地域

[大槌町の概要]

被災前人口：15,277人
被災前高齢化率：29.9%
就業人口別構成：
第1次産業 9%
第2次産業 37%
第3次産業 54%

[被害状況：H23.6.30 現在]

津波高さ：不明
浸水面積：4 km² (国土地理院)
人的被害 (岩手県発表)：
死者：783人 行方不明者：827人
住宅被害 (総務省消防庁発表)：
全半壊・一部損壊：3677戸

[参考：大槌町の過去の被災状況]

- 明治三陸地震 (1896)：波高：3.8m 死者：900人 流失倒壊：500戸
- 昭和三陸地震 (1933)：波高：2.3m 死者：27人 (大槌・小槌) 流失倒壊：222戸
- ・大槌町を襲ひたる昭和8年津浪高は満潮面上2.3m、家屋の流失倒壊戸数222戸、浸水135戸を出せるも、本地方に於ける一の経済中樞をなせる本市街地は現地復興の外なく、幸に津浪の勢力土木工作物に依りて防ぎ得る程度のものなるを以て、充分の豫防法を講ずれば、被害を極度に減少し得べし。即ち大槌川右岸を整理し之より小槌川左岸に至る防浪堤を設くるを得ば、本市街地を挟む兩河川は緩衝地帯となりて、津浪の災害を軽減するを得可し。街路復舊事業として路線数11。延長合計1367m、幅員5.0m及至11mに施行す。内務大臣官房都市計画課『三陸津浪に因る被害町村の復興計画報告』(1934年)

45号線で、三陸海岸を北上する。JR山田線と並行する280号線から大槌町に3時頃に入り、車中から被災した市街地を眺める。地震発生から30分で高さ15mの津波が来たとのこと(計画津波高=防潮堤6.4m)。町長が亡くなった町役場の光景に合掌。

吉里吉里でしか知らなかった大槌。多くの施設が280号線沿線にあったためか、地震直後に学校や買物、仕事場からの避難車が集中し、大渋滞に陥った県道。港と2つの川の3方向からの波が車を巻き込み、歩行での高台避難の方が助かったとの記事を思い出す。大槌川を越えて右折する交差点では警官2名で誘導していたが、津波到着直前に最も渋滞した場所とのこと、事前避難訓練の大切さを痛感する。

きっと、3月11日当日の現地の人々の感情は、何千倍・何万倍も強く、切なく、不安や不義の思いの中で、生きることの無情を味わったのだらうと思うと、津波が破壊した三陸の市街地の中をうろつきながら、生死を感じる自分が居ることを自覚した。

————— (藤沢)

各地で火災が起こり、町役場を含め大部分の建物が流失した大槌町は、平場を求めて宅地化された地区はすべて流され、瓦礫が撤去された何もない光景が広がっていました。灰色の風景が広がる背後に、普段は建物に隠れていた山々が見渡せ、今は静かな海が見え、とても美しいラインをつくっていました。

————— (伊藤)

観光船はまよりの乗り上げている付近に立ち寄る予定であったが、交通規制がかかっていた。昨日通ることのできた道路が今日は通行できない。日々刻々と状況は変わっているとのことであった。三浦さんの住んでいた町。「今日も船が出ていませんね」「あそこの家はこのごろ建てられた」「ここは壊すことにしたようです」などの震災前の日常の風景、人々の生活、震災後の変化。今は何も見えない景色に、場所ごとの様々な情報があることを思い知らされた。これからつくられるものがまた住民の思い出の風景、街の雰囲気になることをひしひしと感じた。

————— (前田)

山田町や大槌町で見たのは、津波時に多くの建物が焼けた跡である。陸中山田駅は、駅舎もホームも全て火がまわり、ひしゃげたホームの屋根と黒くすすけた駅舎が残されていた。気仙沼で夜を徹して燃え続けた大火や、プロパンガスが引火して流れながら燃える建物の映像は目にしていたが、津波と火災という逆説的な組み合わせをあらためて考えさせられる。

————— (古林)

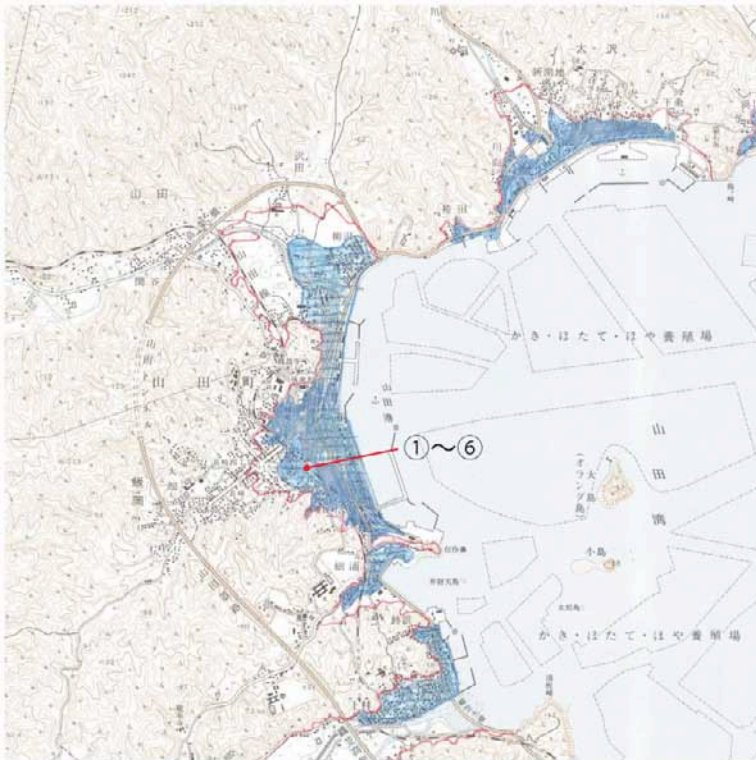


①② (撮影：伊藤)



③④大部分の建物が流失 津波の際に各所で火災があった (撮影：中川)

15:55～16:20 [山田町]



図中の数字は写真番号
日本地理学会作成 赤:浸水地域 青:建物被害が甚大な地域

[山田町の概要]

被災前人口：18,625人
被災前高齢化率：31.9%
就業人口別構成：
第1次産業 21%
第2次産業 29%
第3次産業 50%

[被害状況：H23.6.30 現在]

津波高さ：不明
浸水面積：5 km² (国土地理院)
人的被害 (岩手県発表)：
死者：583人 行方不明者：134人
住宅被害 (総務省消防庁発表)：
全壊：2789戸 半壊：395戸
一部損壊：120戸

[参考：山田町の過去の被災状況]

- 明治三陸地震 (1896)：波高：6.57m 死者：840人 流失倒壊：388戸
- 昭和三陸地震 (1933)：波高：4.75m 死者：7人 流失倒壊：406戸
- ・1933年266戸の流失の惨害を受けたが、移動しては全く地方都市としての機能を失うからと、護岸工事、防波堤を完全にして、非移動のまま再興した。
山口弥一郎「津波常習地三陸海岸地域の集落移動」(亜細亜大学「諸学紀要」第11号, 1964)
- ・当時 [昭和津浪後] はコンクリート構造物は高価であり、田老のほか、吉浜本郷、釜石、山田などに防潮堤が築造されたにとどまった。なお、チリ津波はこの防潮壁の切れ目から浸水し、防潮壁のためになかなか水が引かなかった。中央防災会議災害教訓の継承に関する専門報告書『1960 チリ地震津波』(2010年)

J R山田線と並行に走る45号線で、山田に向かう。午後2時46分で時が止まった時計台のある陸中山田駅前に到着。

計画津波高=防潮堤6.6m、津波高6.3m。関口川からの遡上が1.6km。駅の東口も西口も路線商店で賑わっていた盛り場が、人影も建物もないゴーストタウンになっている。その駅前に2台の客待ちタクシー。運転手の習性だとしても、まちの暮らしを象徴する復旧の第1歩とみると、思わず乗りたくなる。

建築の津波対策をどう考えるかについては、もやもや感がある。中高層建築には生命を守れる可能性があるが、低地の木造家屋に暮らす人を津波から守ることはできない。津波危険地帯では、生命を優先したまちづくりが何より大事に思える。避難タワーや防浪ビルも真剣に検討すべき復興テーマだ。

————— (藤沢)

火災で焼けてしまった駅前にタクシーが停まっていた。焼けて黒くなった木、その周りに新しい芽が芽生えているのを見て、自然災害の大きさではない自然の力に驚かされ、ホッとしました。

————— (伊藤)

陸中山田駅から徒歩で移動。何か焼けた臭いと磯の臭いがする。津波で流されず残った駅舎他周辺の建物は火事で焼かれてしまっている。

————— (岡本)

(道の駅やまだ) 途中いくつかの道の駅で下車する。お土産物や山菜、野菜などいろいろある。道の駅は、地元の人の買い出しにも利用されるらしい。この一帯は、崖上の道沿いに住宅が建ち並ぶ。明治三陸地震後に高台移転したと聞く。地震による被害も見られず。集落としての生活がある。陸前高田からここまで道が開けると津波の被害ばかりが眼前に広がっていた。このような状況もあるのだなと感じた。

(陸中山田駅) 駅舎は壊れ、火災のあとが残る。資料などは整理されずそのまま残っている。前の町長が駅周辺の道路を整備したとのこと。駅前のロータリーにタクシーが2台。駅舎も周辺の建物もない。山際にある建物からの無線まちであろうか。タクシーがいる場所として確かにこのロータリー以外に所在ない。

————— (前田)



①～②市街地風景 基礎を残してがれきは撤去。基礎を残しているのは改築扱いで建替えるためか (撮影：伊藤)



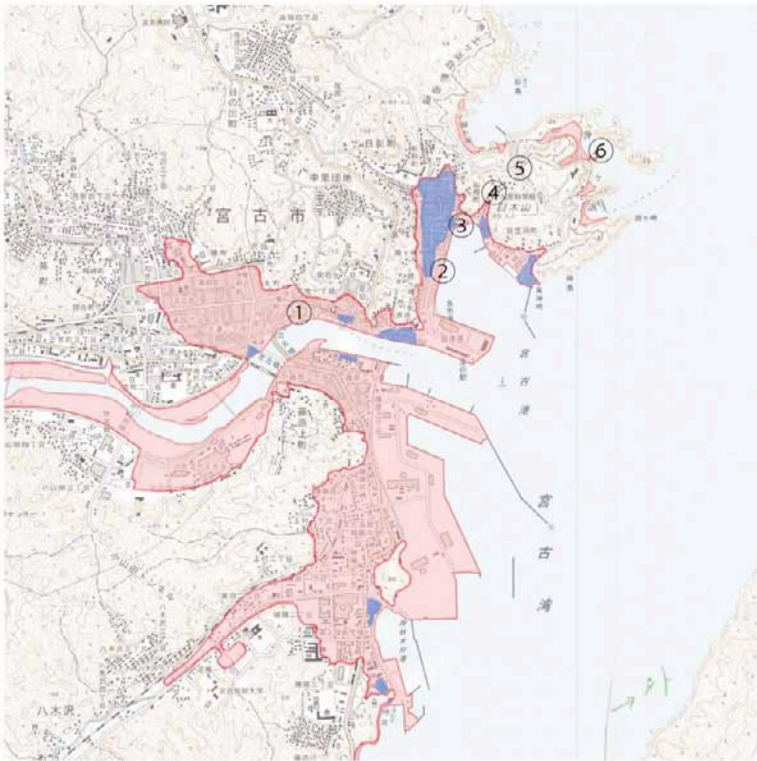
③～④JR 山田線陸中山田駅 津波後の火災で壁が黒くこげている。周辺の建物も火災の痕が見られる (撮影：伊藤)



⑤ホームも焼け落ちている (撮影：中川)

⑥駅周辺 (撮影：中川)

[宮古]



図中の数字は写真番号
日本地理学会作成 赤:浸水地域 青:建物被害が甚大な地域

[宮古市の概要]

被災前人口：59,442人
被災前高齢化率：30.1%
就業人口別構成：
第1次産業 9%
第2次産業 24%
第3次産業 67%

[被害状況：H23.6.30現在]

津波高さ：10.4m（浸水高／港湾空港技術研究所）
浸水面積：10 km²（国土地理院）
人的被害（岩手県発表）：
死者：420人 行方不明者：161人
住宅被害（総務省消防庁発表）：
全壊：3669戸 半壊：1006戸
一部損壊：176戸

45号線から浜街道に入り、宮古市街地を巡回する。

計画津波高＝防潮堤 8.5m、確認された津波高 8m。防潮堤未整備の鯨ヶ崎地区の被害は甚大で、整備された藤原地区にも津波は来たが、比較すると被害は少なく、防潮堤の被害抑制効果が指摘されている。藤原地区は水産加工等の大規模建築が多く、その背後の建物被害が小さいことも確認されている。

剥き出しの鉄骨、そこに絡まった電線コード類などが目立つ建物、基礎だけが残る戸建ての跡地、その付近を整地する様々な重機、巨大な漁船が乗り上げた岸壁などを眺めながら、シャッターを押す自分が空しくなる。これまで来た道路沿いにいろいろなタイプ・素材の仮設住宅がみえる。近くで見たいが、三陸鉄道は被災者配慮のためか、バスを止めることはなかった。そうこうする内に浄土ヶ浜パークホテルに到着。

ホテルの感想。若者ばかりの大浴場に入ったのも久しぶり、夕食・朝食は合宿所のような雰囲気、県警のお国事情が判るようなTシャツなど、生活視点では一番被災地を実感したかも知れない。夜の宮古を訪ねた。駅前地域も 1m以上浸水した盛り場だが、各通り何軒かで輝くネオンや赤ちょうちんを見て心が和む。駅北口にある一軒メの寿司屋は大賑わい、旬の魚を楽しんだ。二軒メのパブも地元親子経営。廃業も考えたが、船乗り達のオアシスとして二重ローン不安をためらわず、改装を決断した生活再建初動店。被災者であるお嬢達も堅実な接待でもてなしてくれた。庶民の中には、不屈の精神力が息づいている。

（藤沢）

車中から市内を望む。駅周辺部も浸水した建物が多いが、営業を再開している飲食店もあるとのこと。閉伊川に添って閉伊街道（国道 106）、再開した山田線があり後背地が良いことの影響もあるだろう。17:15 浄土ヶ浜パークホテル着。観光名所の浄土ヶ浜に降りてみる。遊歩道や東屋が一部壊れているものとてもきれいで穏やかな浜辺。夕日が美しい。早く観光を再開できればと思う。宿泊者は各県の警察が主。客室はあふれ返り宴会場なども仮設の寝床として利用されていた。ホテル内でもシーツ交換は1週間に1回。お茶などのサービスは廊下でおこなっている。復旧作業がこのようなところからおこなわれているのだとつくづく感じた。内陸部でもホテルが復旧作業員などで貸し切られているため観光が再開できないと聞いている。浄土ヶ浜の辺りはもう少し復旧が進めば観光が再開できるようなと思う。しかし、現時点では自粛ムードがいけない云々ではなく（一般に言う）観光は、感情的に難しいのが事実であると感じた。一日も早く観光が復旧できればという思いも、あまりにも軽く感じられ呑み込んでしまう。

————— (前田)



①宮古市役所（撮影：伊藤）



②宮古魚市場 宮古湾に面して建ち、津波被害を受ける
(撮影：伊藤)



③宮古湾を南に望む（撮影：伊藤）



④蛸の浦を南に見る 谷地を津波が駆け上がった
(撮影：伊藤)

翌日の朝食前、宿泊した旅館のある浄土ヶ浜を歩き、入り組んだ地形が創るダイナミックな景色、湾に浮かぶさまざまな形の小さな島々、コバルトブルーの海、地震で崩れてしまい、真っ白な岩肌が見えてしまっているのさえ、美しい景色です。

————— (伊藤)

宿泊した浄土ヶ浜では、三陸海岸の美しさに心が休まった。ちょっとハエが多いのが気になったし、浜辺には津波の傷跡も残っていたが、入り江状の白い石の浜辺や、対岸の突き出た半島の格好は、まさに日本画の世界である。岩塊状の半島の頂上に寄り添うように樹木がかたまり、それが水面に映る様は、山水画の格好の題材に見える。海の透明度も相当なものだった。海面からでも垂直で10m くらいの透明度がありそうだった。東北の海でも趣味で潜る人がいるが、これを見れば確かに潜ってみたいくなる。普段であれば高そうなホテルだったが、数日間の余暇を楽しむには最高の立地だ。しかし、先日テレビで浄土ヶ浜が取り上げられていたが、ここでも海底には瓦礫が沈んでいるという。観光船の発着もしばらくかかるようだ。

————— (古林)



⑤宿泊ホテル近くの県立水産科学館駐車場 仮設住宅が建てられていた (撮影：伊藤)



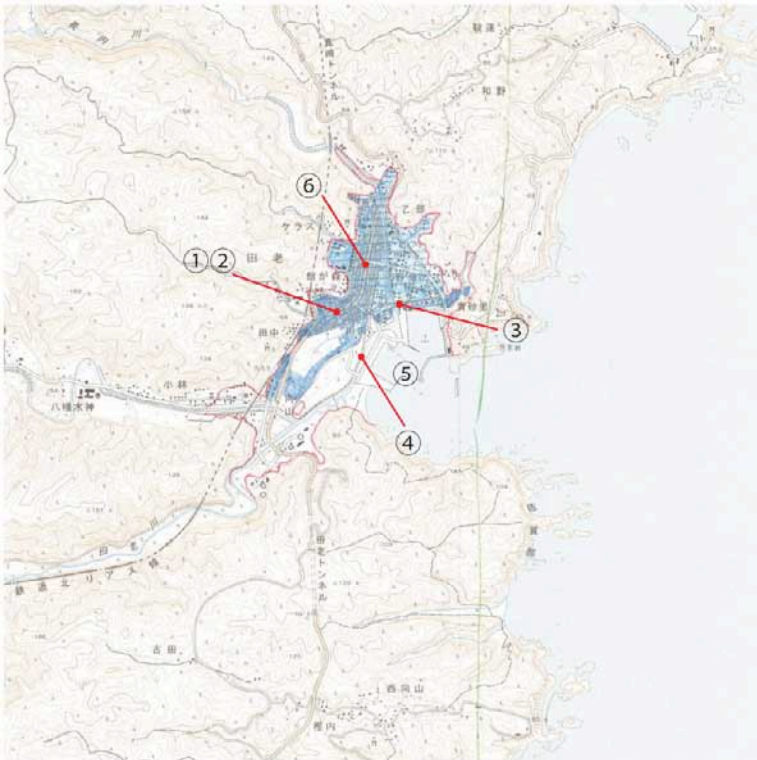
⑥浄土ヶ浜 美しい景観を保っている。津波が海底の汚泥を打ち上げ透明度が増したという (撮影：古林)



⑦浄土ヶ浜パークホテル 全国から来た警察や復興関係者の宿泊場所となっていた (撮影：伊藤)

□6月18日土曜日・2日目：ホテル→宮古市田老地区→田野畑村島越→平井賀→普代村→盛岡

8：45～9：00 [宮古市田老地区]



図中の数字は写真番号
日本地理学会作成 赤：浸水地域 青：建物被害が甚大な地域

[参考：田老地区の過去の被災状況]

■明治三陸地震（1896）

- ・波高：13.64m 死者：1400人（田老村） 流失倒壊：230戸
- ・田老は明治29年には波高15mの津波に襲われ、田老-191戸流失、1407人死亡、乙部-94戸流失、40人死亡の大被害を受け、生存者37人といわれている。この大災害によって、防災対策として、義損金を基金として2mの盛土により宅地造成の計画をたてたが、意見の不一致と資金難のため、道路沿いに約50cm盛土することに終わって原地復興の型となった。建設省国土地理院『チリ地震津波調査報告書』（1961年）

■昭和三陸地震（1933）

- ・波高：7.69m 死者：471人（田老・乙部） 流失倒壊：311戸
- ・防災対策としては高地移動の意見もあったが、500戸を収容する適地がないので、原意の区画整理[耕地整理]により宅地を造成し、防浪堤は900mまで完成して戦時中に中止されたが昭和33年、延長1350m、上幅3m、根幅最大25m、高さ地上7m、海面上10.65mの大防浪堤を完成した。建設省国土地理院『チリ地震津波調査報告書』（1961年）

■チリ地震

- ・波高3.5m 防波堤が防ぐ
- ・田老でもチリ津波対策事業・高潮対策事業として既設の防潮堤に接続する新たな防潮堤を建設し、また、田代川水門や河川堤防も建設したが、これによって堤内地の面積は倍増したものの、緩衝地区は消失したことになる。中央防災会議災害教訓の継承に関する専門報告書『1960チリ地震津波』（2010年）

8時半にホテルを出発、45号線を北上し、田老地区に到着。宮古から久慈の間には湾はないため、太平洋を一望できる海岸線が広がっている。田老海岸はこのエリアの中では、珍しく湾状地形であるが、湾ではない。

計画津波高=防潮堤10m、確認された津波高11.3m。津波と戦うX字防潮堤や要所にある水門。高さ10mの防潮堤に登り市街地を見渡すと、これまでの被災地同様に地平線が見えるほどに、まちなかに残る建物が本当に少ない。ここと野田村は二重の防潮堤があり、要塞のような海岸線の風景が広がっている。海側の防潮堤は相当なダメージを受けているが、陸側にある二重の防潮堤の損傷は比較的少なく、一定の津波減衰効果を果たしたと指摘されている。

—————（藤沢）

高さ 10m の X 字防潮堤。一時 20m 案も出たが、景観の問題や湿気の問題で人が住める環境でなくなるという理由から 10m とされた。海側の防潮堤は決壊した。海側の防潮堤は比較的新しいものであり、陸側に残った防潮堤は古いものを補強しながら現在に至っていた。スマトラ島沖地震の際、インドネシアのある場所においてオランダ植民地時代に築かれ、現在まで増強、メンテナンスを繰り返してきた防潮堤が津波を防いだという話がある。防潮堤は、一度築けば終わりというものではなく、常に補強増強を繰り返していくものだという。街が、新陳代謝を繰り返しながら生きていくのと同じだ。街と共に生き続ける防潮堤、単なる津波対策にとどまらず、街の風景の一部として誇りをもてる防潮堤。これも復興に向けて大きなテーマとなる。鞆の浦の港湾施設のように愛される土木景観を創出できたらよいだろう。

また、ここ田老地区の防潮堤はチリ沖地震の際に十分機能した実績があり、その経験から今回防潮堤の力を過信し避難の初動が遅れ被災された方もいると聞く。ハード面での対策だけでなくソフト的な避難計画の重要性が痛感される。

————— (岡本)

空から見ると X 型に組み立てられた 10m の防潮堤。漁協の貯氷施設の山肌で明治三陸津波水位 (約 15m) が示されている。今回の津波は防波堤を乗り越え、水は 1 日引かなかったとのこと。田老の防潮堤の長大さとそれを乗り越えおそってきた津波。防波堤の下から見上げると恐ろしい。田老出発後 45 号線に戻る。一般車の車列に遭遇。三浦氏曰くグリーンピアで行われる合同慰霊祭の車列のようだとのこと。「グリーンピア三陸みやこの仮設住宅の視察」はなし。震災から 100 日目の合同慰霊祭「百か日」にあたることを帰ってから知った。

————— (前田)



①～②陸側の堤防 高さ 10m の堤防の内部に津波が侵入、市街地のほぼ全ての建物が流失した (撮影：伊藤)



③海側の北側堤防 津波により破壊 (撮影：伊藤)



④海側の南側堤防 健在だが、津波は容易に乗り越えた (撮影：伊藤)

海際を走ると、大規模な構造物の破壊が目につく。基礎から転倒した防波堤・防潮堤、高架ごと流された田野畑村の鳥越駅、宮古市田老地区の巨大堤防・・・。驚くほどの力が津波の際に集中した様をまざまざと見せられ、物理的に津波災害を防ぐことの限界を感じる。

————— (古林)



⑤漁港を囲んでいた防波堤 バラバラに流され、基礎から転倒している (撮影：伊藤)

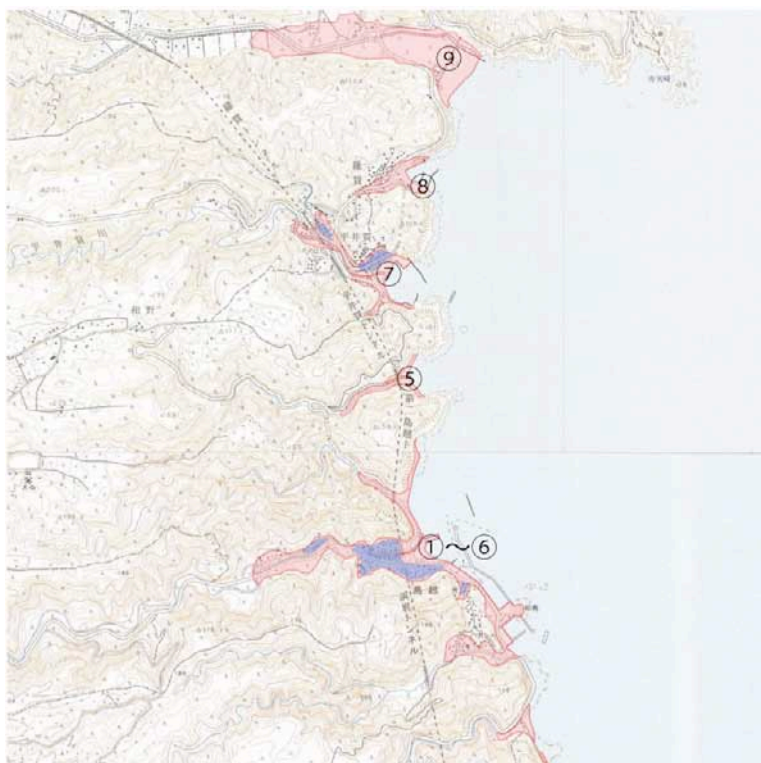


⑥市街地の状況 山際の建物のみかろうじて残るが、浸水しており、使用できない (撮影：中川)



⑦高台に建設された仮設住宅 非常に密集して建てられている (撮影：伊藤)

10:00~10:15 [田野畑村島越]



図中の数字は写真番号
日本地理学会作成 赤:浸水地域 青:建物被害が甚大な地域

[田野畑村の概要]

被災前人口 : 3,843 人

被災前高齢化率 : 32.5%

就業人口別構成 :

第1次産業 %

第2次産業 %

第3次産業 %

[被害状況 : H23. 6. 30 現在]

津波高さ : 不明

浸水面積 : 1 km² (国土地理院)

人的被害 (岩手県発表) :

死者 : 14 人 行方不明者 : 11 人

住宅被害 (総務省消防庁発表) :

全壊 : 225 戸 半壊 : 45 戸

一部損壊 : 4 戸

[参考 : 田野畑村平井の過去の被災状況]

■明治三陸地震 (1896) : 波高 : 15.8m 死者 : 98 人 (田老村) 流失倒壊 : 235 戸

■昭和三陸地震 (1933) : 波高 : 10m 死者 : 46 人 (田老・乙部) 流失倒壊 : 126 戸

・明治29年津浪高15.8m、昭和8年10m、住宅適地は之を二ヶ所に分ち、一は舊部落地北方斜面を切り均して17戸を收容し、他は舊部落より西北方約350mを隔てたる山間の平地部「部落共有地」を選定し、30戸を移轉せしむ。但し後者は地盤の高度比較的低きを以て、明治29年程度の大津浪に際しては浸水をまぬかれず、之を避くる爲防浪堤を築造するものとす。兩者の總面積3179坪。内務大臣官房都市計画課『三陸津浪に因る被害町村の復興計画報告』(1934年)

海岸から内陸の風景になった45号線を北上、松前川沿いの古道から海岸に向かい、島の越漁港海岸地区を経て島越駅付近に到着。

計画津波高=防潮堤14.3m、津波高11.6m。地区南にある島の越漁港海岸での痕跡から、津波高さ23.7m(最大値)が推定されている。できるなら、算定(推定)方式の整理された数値が欲しい。

三陸鉄道運転手の機転で、トンネル内で車両を止めて客を避難誘導した直ぐ先にある線上橋駅。トンネルを出て駅に近づいていたら、全てが流されていたと判る光景を見る。小さな砂浜伝いに漁港の波止場を歩く。ここは平場が狭く、まわりは絶壁の海岸線、波が集まるこの地形の場所で、まちを築き、暮らすことの意味に思いをはせる。

————— (藤沢)

翌日にまわった北リアスの小さな村々でも、崩れた線路や駅舎など、津波の爪痕を見ました。でもそれよりも、深く入り組んだ小さな湾や港に山がせまる地形がとても綺麗だと思いました。どこか離島の誰もいない海岸のようです。

————— (伊藤)

駅舎、高架が流された。巨大なコンクリート橋脚と高架橋が横倒しになっている。橋脚基礎をみると直接基礎であり柱は折れず基礎が地盤からはがされそのまま倒れている。どこか1本がまず倒れ、つながった高架橋に引っ張られる形で次々に橋脚が倒れていったように見える。杭基礎であれば持ちこたえた可能性はある。被害状況の分析からでてくる技術的対応策も復興にあたり十分検証される必要があるだろう。ちなみに三陸鉄道の全線復旧には100億円以上の費用がかかるとされている。単純に費用の捻出だけでも難しいことだが、沿線の街の少子高齢化や幹線道路の充実による鉄道需要の減少という事実もあり復旧への道のりは険しいとのことだ。それらの問題は、鉄道復旧に限ったことではないし、被災前からある話だ。街や地域の復旧にあたって常に考えなくてはならない。どうやって街を復興するか、持続させていくか。

駅前に宮澤賢治の歌碑が倒されず残っていた。今回のように形あるものがなくなってしまう天災のあとで地元に賢治のような人々の心の支えになれる存在がいるのは大きい。地域が一丸となって復興を目指すとき



① 高架にあった三陸鉄道北リアス線島越駅ごと線路が流失（撮影：中川）



② 橋脚は倒壊 基礎がむき出しになっており、洗掘破壊の様子が見て取れる（撮影：中川）



③ 漁港の防波堤は転倒、流失（撮影：中川）



④ 観光船の発着していた港湾施設も破壊（撮影：中川）



⑤ 部落全てが流失。手前は駅の階段（撮影：伊藤）



⑥ 宮古以北は、海岸のすぐ先で深くなる（撮影：伊藤）

共有できるシンボルがもてるというのは、頼もしいことだと思う。

————— (岡本)

縦貫道（国道45号線）に戻り、榎木沢にかかる榎木沢橋を渡り鳴越へむかう。途中、松前沢の思案橋手前で縦貫道を降り、沢沿いをくねくねと下る（10:00）。はるか上に「思案橋」の橋裏側が見える。「その昔、田野畑村に越してきた教師があまりにも道がきついため職を辞して帰ったといわれる辞職坂（三浦氏）」に架かる橋。高低差の激しい急峻な土地。震災直後、海岸沿いの道は被害を受け、通行できない。沢沿いの道も曲がりくねり道幅も狭い。縦貫道が物資の輸送に役に立ったというのは思い知らされた。道路がなかった昔の港の必要性を思う。交通の手段としての海上交通が求められていたこと、風待ちの港としての必要性があったことなどを思った。これからは縦貫道か。石巻市唐丹や普代村で建設途中の橋脚を見た。6月の岩手県復興計画案にも骨格的防災施設として位置づけられている。求められている機能は変わってきていると感じた。

北リアス線の線路は崩壊している。三陸鉄道の現状復旧には100億。バリアフリー化などのバージョンアップでプラス80億とのことだった。三陸鉄道も復興計画案の骨格的防災施設として位置づけられている。三陸鉄道は第3セクターとして国鉄から引き継いだ事業とのこと。沿岸沿いのまちと教育施設、医療施設などを結ぶ路線として位置していたが、震災以前も過疎化や医療施設の幹線道路への移転などで営業が苦しい現状であったとのこと。道路は、縦貫道の交通はあまりなく、まちに降りると一般車によく出会う。生活に密着した道路は下の道なのだと感じた。自動車道と鉄道。交通行政としての位置づけ、採算の取れる計画となるのだろうか疑問。（10:45）鳴越の北、田野畑駅近くの羅賀の10階建て程度のホテルは、2層目までコンパネで養生されていた。復旧し再開するのか。陸中海岸シーサイドラインを北上。車中からリアス式海岸とても美しい。途中、入江の番屋は津波の被害で跡形もない。

————— (前田)



⑦平井賀海水浴場脇の水門（撮影：伊藤）



⑧旅館羅賀荘（田野畑村羅賀）3階まで浸水（撮影：伊藤）

10:40頃 [田野畑村平井賀]

道路は44号線となり、海岸線を更に北上、車窓から被災した平井賀地区と残った水門を見る。被害程度は比較的軽微とのこと。

————— (藤沢)



⑨田野畑村明戸 キャンプ場があったが堤防が決壊。（撮影：伊藤）

11:00頃 [普代村太田名部・宇留部]



図中の数字は写真番号
日本地理学会作成 赤:浸水地域 青:建物被害が甚大な地域

[普代村の概要]

被災前人口：3,088人
被災前高齢化率：31.4%
就業人口別構成：
第1次産業 %
第2次産業 %
第3次産業 %

[被害状況：H23.6.30現在]

津波高さ：不明
浸水面積：1km²（国土地理院）
人的被害（岩手県発表）：
死者：0人 行方不明者：1人
住宅被害（総務省消防庁発表）：
被害無し

44号線を海岸線沿いに北に向かい、津波を防いだ普代村太田名部の防潮堤を見た後、普代村中心地を車中から眺める。計画津波高=防潮堤15.5m、確認された津波高の数値はないが、太田名部防潮堤を越えた形跡はなく、宇留部防潮堤は越えて普代川を遡上したが、背後地の家屋被害は全くなかったとのこと。津波体験を学び、海岸から1.5kmほど離れた市街地計画が功を奏したまちである。

金子さんから三陸には「津波てんでんこ」の言い伝えがあることが解説される。漠然とではあるが、自助・互助・扶助が生死を分けることを実感した。

————— (藤沢)



① 普代浜海水浴場から500m内陸に建つ水門
(撮影：伊藤)



② 海岸から1.5kmは雑木林が続く。浸水しているが、樹木が津波の威力を減衰 (撮影：伊藤)

家屋倒壊数 0。水門堤防が津波を防いだ。建設に反対した住人も少なからずいたようだが村長の強い意志により高さ 15m の巨大な水門を設けていた。水門までは全てが流されてしまっているが、水門の中は守られていた。村長は、村の英雄になるだろう。ただ、水門の威圧感はかなりのものであり、海と街の視覚的つながりは全くなく海と密接な関係を築いてきた村のありかたとして疑問に思う人がいるのもうなずける。今回の津波に対する普代村の成功例にならい、今後他地区でも長大な水門を設けるのか、別のありかたを模索するのか議論のしどころだろう。

————— (岡本)

太田名部の 15m の防潮堤。細長く入り込んだ地形の谷間をつないでいる。防潮堤から 1km 程度内陸に町がひろがる。防潮堤で守られ家屋への浸水被害はなかったとのこと。集落は海とは断絶しているように感じた。普代駅の駅舎には車両が 1 台とまっている。

————— (前田)

【盛岡】

その後 45 号線（浜街道）に入り龍泉洞での昼食後、長時間ドライブを経て盛岡にて解散。震度 5 の盛岡駅前を歩いただけだが、地震被害の爪痕が見られない日常の光景にほっと一安心。

帰路の車中での感想：何度も体験した地震津波、この地域で強く伝承され、構築された防潮堤。土地の記憶を受け継ぐことの大切さを痛感する。昔の津波から学ぶということ。土地には本来の意味がある。津波が来る土地かそうでないかが本質的な地域特性である。そうした土地の履歴を十分に理解した上で、地域の都市計画があると市民が理解していたとすると、専門家に大きな責任がある。理解していないとすれば、そうした情報を制限していた専門家に大きな責任がある。

最後に、この機会を設けてくれた自主研事務局と三陸鉄道関係者に感謝。百聞は一見にしかずを体験し、色即是空の意味を考えたいと思った二日間であった。

————— (藤沢)



北上川を跨ぐ開運橋ごしに岩手山を望む
いつも通りの風景
ほぼ被害は無かったが、心理的にはかなり落ち込んでいるようだった



中央通商店街の人影はまばら。飲食店の客の入りも悪い



中央通商店街の人影はまばら。飲食店の客の入りも悪い



町家の残る鉾屋町。木造家屋が密集しているが、居住者によると「土壁の縁から土が少し落ちて来た程度」



みちの駅で「しおでこ（しょんでこ）」というアスパラに似た山菜を買いました。あまり出回らない山菜のようで、バスの運転手さんは「山菜の王様」と言っていました。

————— (伊藤)

三浦さんの話によると、沿岸部、内陸とも第1、2次産業の人口は減り、若者の就職先といえば役場か工場という現状。都市部に人口が流れ過疎化に悩まされている状況が震災前からあった。内陸部においても林業は衰退しており、手入れの行き届かない山林が目立つ。荒れた山ではキノコの成育も悪いらしい。観光名所の竜泉洞で昼食(12:30)。今の時期は観光バスが行き交うという山道も閑散としているとのこと。駐車場には岩手県や秋田のナンバーが主。若干の観光客がいてほっとする。反面、内陸部と沿岸部の格差を感じた。盛岡市内は地震の被害が見受けられなかった。いくつかの思い、考えは浮かんでくるが、現実には目の前にした情報量(それぞれのまちの違い/震災前の状況/もっと過去/これから)に圧倒され、浅はかに思ったことはすぐに吹き飛ばされるとというのが現状。まずは身の回りの防災を考えようというのが結論。盛岡駅の土産物屋で釜石酒造の浜千鳥を発見。岩手三陸の100日目とこの震災を忘れないためにたまにちびちび呑むことにします。

————— (前田)

最終日は盛岡に一泊し、当地で工務店に勤める友人と、久しぶりに会った。思った通り、「今はホヤもカキも北海道産しか無いよ」との話で、焼き肉屋を戦略的に選択。冷麺発祥の地として名高い、中央通り裏手の食堂園に入る。コクのある透明なスープのあっさりとした冷麺。値段の割に肉も美味い。盛岡に来て焼き肉を食わない手は無い。二件目は、お城の前の神社敷地にある、昔の闇市の流れが続く飲食店街に行く。じゃじゃ麺屋の白龍の本店もここにある。狭い路地に数十件の既存不適格な飲み屋がひしめく一角だ。官庁街にも近く、普段なら多くの人で賑わう場所だ。しかし、入った居酒屋には他に客がいない。

盛岡は地震による被害がほとんど無かった。盛岡市内には大正一昭和初期の町家も残るが、中心市街地ですぶれたものは無かったようである。しかし、被災地の近さが心理的な圧力となり、飲食店等は震災後かなり客足が遠のいた。この日は、若者を中心に中央通り商店街の人通りは比較的多かったが、チェーン居酒屋とにわか風俗店が目立つようになったこの街で、個人経営の落ち着いた居酒屋に入ってくる客は少ないのか。

また、岩手県への観光客も激減している。被災当初、盛岡市内のホテル・旅館は復興関係者に溢れたが、しだいに宿泊先が被災地に近い場所に移り、空きが多くなってきたという。特に、修学旅行客が全く来なくなり、宮城県等から、福島のお会津若松旅行の代替として盛岡に来ているくらいという寂しい状況である。市内のホテルは自ら「被災地復興キャンペーン」と銘打ち、安売り合戦の様相。

震災以前から県北は厳しい経済状況が続いていた。そこにきて今回の地震が何となく外で騒いではまずい雰囲気をつくっている。実際問題、例えば仮設住宅の発注にしても大部分が県外業者に流れ、地元の小規模業者が孫請けで設備を取り付けにいったところで「職人の日当にもならない」状況で、金回りも悪いという。

まちの物理的な復興もさることながら、産業の復興、つまりは地域でカネの循環を取り戻すことも、岩手において急務である。

————— (古林)

東日本大震災被災地視察で感じたこと

————— (伊藤)

視察前、岩手県の被災地復興に関する提案作業に少し関わりました。被災地がどういう街であったか、どういう暮らしがあったかまったく理解していないことに不安をもって概念図を描きました。視察で現地に行けば何か、被災地の街について知ることができ、考えることができるのではないかと思っていました。

*

まちを歩き、まちを体験して、その街の道路構成や空間の密度、自然や地形など、「まちの空間特性」を把握することや、居住者の年齢構成や世帯構成、暮らしなどを知ることを通して、まちの魅力や資源を見つけ、活かすことを考えてきました。ワークショップなどを通して、居住者や関係者の話を聞き、その思いを手がかりに空間に反映することを考えてきました。視察でもまちを体験することで、まちの特性が少しはわかるような気がしていました。

*

大きな被害を受けた被災地で何もない光景を体験しました。人の気配もなく、植物もなく、瓦礫のあとが海岸まで続く光景を見て、自然災害の恐ろしさを感じましたが、街の姿を再建する手がかりとなるものを見つけることができませんでした。

*

道中、三陸鉄道の金子氏が地域のことを色々話してくれました。それを手がかりに少しでもこの地域の街のこと、人々の生業や暮らしのことを知りたい、想像したい、体験したいとメモをとりました。

*

三陸海岸でも、宮古市の北と南でリアス式のタイプが違い、南は起伏の大きい山地に海水が進入して、尾根の部分が半島に、谷の部分が入り江になったもので、北は、海岸線が隆起したことによって生まれた海岸で、海岸線は切り立った断崖になっている場所が多いそうです。被災地をまわりながら、陸前高田市や釜石市、山田町などの湾に開いた地形、鳥越や平井賀など湾を囲んだ小さな村が点在する北リアスの地形のことなど、被災する前に一度来ておけばよかったと思わずにいません。

南リアスは、その地形を利用した牡蠣やアワビなどの養殖などが盛んで、三陸鉄道でも焼きガキなどのイベントを駅で行っていたそうです。6月はウニ漁シーズン、鮭の定置網漁の話、松茸の話…
陸前高田市の人々にとっては、気仙沼や仙台が近くの大いなる街になり（仙台圏）、宮古市や釜石市は盛岡圏、久慈市は青森八戸圏だそうです。釜石から北は南伊達藩、南は南部藩…。

津波に対する教訓のひとつに「津波てんでんこ」というのがあり、津波の時は各々で逃げなさいという意味だそうです。戻ってはいけないという教訓。

*

色々な人からの言葉がもとの街を知るヒントになり、また今後の復興の資源になると思います。自分の中で、言葉や資料を頼りに、地形や風景と震災前の街の姿や暮らしをイメージする必要性を感じました。

*

4ヶ月経った今も大きな進展があまり見られません。まずは、現地の人々の暮らしを立て直し、色々な人の話が聞くことができればと思います。ちょっと日常から離れ、将来を語り合えるような、ちょっとした街かどカフェや居酒屋のような場所が仮設住宅等にあるといいと思いました。

全体を通して受けた印象とこれからのこと

————— (岡本)

国道で市街地に向かうと、とある場所から突然津波被害の実態が始まる。その瞬間は必ず市街地へと下っていく道路のあるレベルではじまる。そのレベルが津波で浸水したラインであり、それ以下の範囲は全て津波の爪跡が残る。文章で書くとあたりまえのことだが、現地をバスで巡りその広大な範囲で地上のものが流され海水で満たされたかと思うと津波の力の強大さに為す術を思いつかない。

もう一つ、バスで市街地へ入るときに気づくこととして「これより先津波浸水想定区域」の道路標識があり、今回の被害がほぼそのライン以下で起きていることだ。自治体の津波被害予測が、起こりうる最大規模の津波をかなり正確に想定していたことがわかる。津波の規模が予測されたものだっただけに避難計画の徹底や適当な避難施設があれば人的被害を減らせた可能性はあるだろう。

今回視察区域の中では普代村以外の場所で防潮堤が決壊または想定高さを越えて津波が市街地を襲った。津波に対する絶対的な安全策は、単純に考えれば高台に住宅地をつくるということになるだろう。

しかし、生業とともに発展してきた土地の記憶、コミュニティ、現実的な高台の土地の確保の困難さ等を思うと最善の策とは思えない。今回バスで通過するのみであったがその地形がつくる風景、街々の個性的な姿は、津波被害の惨状を前にして使う言葉として不適切かも知れないが、誤解を恐れずいえばとても魅力的だった。また、ガイドをしてくれた三陸鉄道の方々をはじめ、いろんところで地元への愛情の強さを感じることが出来た。その印象からは、元の街の姿に戻していくことが良いように思った。津波対策として避難ビルや避難計画の充実、避難意識の徹底。数百年に一度といわれる今回のような大津波に対しては、建築基準法の数百年に1度の大地震に対する耐震の考え方と同様、最低限「人命の保護」を保証し、建物倒壊の被害を許容した考え方が妥当ではないだろうか。

さまざまな話を聞かせてくれたガイド役の地元三陸鉄道の方は、「しばらくは海に船がなかった。それはとても違和感のある風景。今日のように船が出ているのをみると安心感がある」と言っていた。そういう光景がこれから1つ1つ増え、早く元の日常が戻ってくるよう応援したいと強く思った。

被災地雑感

————— (古林)

政府の復興構想会議の答申が先頃示されたが、「減災」という考え方を主眼にすえ、物理的防御を主とした津波対策からの脱却を標榜した点だけは、大いに評価される部分だと思う。とは言え、今次の震災復興で求められるのはスピード感であろう。高齢化率が3割を超える被災地では、時を追うごとに一次産業からの転廃業者、若い世代の地域外への流出が顕著に現れると考えられる。復興にかかる時間によっては、地域から出た方が生きる道を探せる可能性が高まる場合があるのが、以前の明治三陸地震、昭和三陸地震の時と大きく変わった点ではないか。そういう意味では、復興会議の示した、大規模な高台移転、かさ上げ、低地部分の用途純化といった手法が、スピード感に見合うものなのか疑問が残る。恐らく、復興会議の掲げるような大きな意味でのまちづくりの姿は理想型として堅持しつつも、次善策として現在の街に近い姿だが津波の際にはより逃げやすいまちの姿も想定しておくべきではないのか？

チリ地震の調査報告書は、過去の津波被害や対策もまとめられており、経緯が理解しやすい。これを見ると、同様の議論が繰り返されていることが分かる。明治、昭和の三陸地震の後にも、高台移転、盛り土、築堤といった計画が立てられ、その一部は実施されたが、予算不足により実施が見送られたり、防災意識の低下に伴い低地への人々が再流入したりすることで、現在のような状況が繰り返されて来た。元来、海との関係で生業を保ってきたこの地域の人々全てが、生活領域を海と分けることに限界があるのかもしれない。

①高台移転だけでない多様な復興まちづくりを

国や自治体レベルで、沿岸部は産業エリアとし高台に居住エリアという用途ゾーニングが提唱されています。確かに、かつての大津波を契機に高台移転を成し遂げた田野畑や吉浜地区では、人的被害が最小限に抑えられましたし、津波の被災地では敷地の高さ 50cm 程の差で家屋の被害に天と地ほどの差があるところが多く見られました。現地を見てみれば高台移転が究極の防災対策であることは確かでしょう。

高台移転・高台造成は、仙台平野など平地部の大きな地域では有力な選択肢と思われませんが、三陸など高台の平地が少ない地域を見てみると、やはり一般解とは思えません。また居住地が海から離れることで、入り江の地形と一体となった港町の雰囲気や活気、海とともに暮らしてきた生活文化が失われてしまいます。農業では、農地を整理大規模化して低地に誘導することは有効だと思いますが、漁業は観光資源としての意味も大きく、港と居住地の分離は魅力を殺してしまうことが懸念されます。また、高台の平地が少ない地区などでは、そもそも一律の移転には無理があると思われま



三重県大紀町の津波避難タワー

今回の災害では、大規模 RC 建物の耐津波性はある程度示されましたし、三重県大紀町の津波避難タワー（右写真・普段は集会所を兼ねているという）のような構造物で避難場所を確保することも、大規模な造成に比べれば圧倒的に低コストでかつ有用と考えられます。高台移転だけでなく様々なアイデアを持ち寄り、地区ごとにきちんと合意形成を図って復興の姿を描くことが重要と思われま

②地域の歴史の継承と防災インフラのあり方

今回の視察では、田老町を見てショックを受けました。高さ 10m の立派な堤防が城壁のようにぐるりと市街を守っており、この堤防はほとんど無傷だったわけですが、想定以上の波が堤を悠々乗り越え、まちを押し流し、また海側の新しい堤防は波の力で決壊していました。工学の敗北を痛烈に感じました。

堤防が取り上げられることの多い田老地区ですが、まち全体がゆるやかにカーブを描く大通りを中心に、道路や歩道が広くとられた碁盤状のまちでもありました。これは避難のしやすさのために長年改良し続けられた結果で、交差点などは隅切りが大きく取られ、高台へ続く道は直線とされ、登るべき階段や避難場所が見えるように配されていました。いわばニュータウンのようなもので、安全で住みやすい街であったと思われま

ただ、そのまちづくりの過程では、漁師町らしい風景が薄れてしまったのではないだろうか、とも思いました。人命や財産を守ることは大事ですが、余所者の目から見れば、小さな漁村まで碁盤状になって色気のない整然とした道路が造られるのがいいのかどうか、難しい問題に思えます。

命を守るのかノスタルジーかといった極論にはしらず、それらをうまくバランスさせるまちづくり／地域の風景や暮らしも継承・尊重する復興まちづくりの考え方・進め方が問われていると思いました。また繰り返しになりますが、地域住民の合意形成がなにより重要となるでしょう。



大船渡市の港を見下ろす神社／津波避難所でもある

この規模の津波が次に来るのが数百年後としたら、どんな知恵とまちづくりが必要なのか。そして、いまの被災地の人々の暮らしを考えたとき、どんなまちづくり・住まいづくりが必要なのか。まちの構造・骨格は人々が暮らしている限り、数百年以上は残ります。けれど建物は長持ちして 50～80 年、百年以上もつたら例外的です。次の大津波に向けて必要なことと今の暮らしのために必要なこと、どう折り合いを付けて、どう歴史を引き継いでいくかは、とても難しい問題です。

さらに、阪神淡路との大きな違いとして、地域の高齢化や雇用の問題など様々な課題が複合的に絡んでいることが挙げられます。もし地震がなかったとしても、厳しい状態であったところも多く、被災地には仕事がなくなって、若い人々には外に出て行かざるを得ないケースも多いようです。こうした被災地でどのような復興住宅をつくるべきなのか。今後地域の高齢化・単身化が加速していくと、住戸と住まい手のミスマッチが広がっていくことが予想されます。こうした課題について、これまで長く集住のあり方や住宅ストックに取り組んできた集住研が果たせる役割はたくさんありそうに思われました。

③被災地と支援者のネットワークづくり

三陸を高田から普代まで 120km 見てまわって、リアスの地形と海、入り江の港の佇まいが本当に美しく、地震の前にちゃんと来ていればよかったなあと思いました。まち全体が無の空間となり静まりかえっていた陸前高田や、前述の田老の街の様子に強い衝撃を受けつつ関心を高めまし、個人的にはインターネットを通じた行方不明者検索サービス（Google Person Finder）のデータ入力のため避難所の手書き名簿のテキストデータ化のお手伝いをした釜石にも強い思い入れがあります。これからも継続的に来て東北を応援したいという気持ちを強くしました。

そうしたことから、無名の被災者と無名の支援者という関係ではなく、どこか特定の街や地域を継続的に応援するような、被災地と全国のまち・人々をつなぐサポートのネットワークをつくることができると、継続的な支援に繋がるのではないかと思います。また反対に「被災者自身が誰かの役に立つ」ようなシーンをつくること、ニーズとシーズを相互に結びつけるサポートのしくみやコミュニティビジネスの基盤を作ることができれば、避難所や仮設住宅の被災者の「生活の質」を高める上でも重要と思われれます。

もちろん、個人個人が好きなように好きな場所を応援していただいてもいいのですが、もう少しシステムチックに、支援の行き先の偏りを減らすよう効率的に運営するしくみがあるほうが望ましいでしょう。インターネットや携帯の普及によるコミュニケーションのインフラや、NPO/NGO といった組織形態が社会で一般化したことによって、そうしたネットワークづくりの素地は整っていると思われれます。

<被災地視察感想>

津波の様子や被災後の悲惨な状況はニュース映像等でおおむね想像できていたが、3ヶ月以上たつてなお街に現地の人々の姿がなく、がれき撤去作業のみが散見されるだけという今のこの様相にこそ悲惨さをより感じる。もう生き返る事ができないかもしれない、という街の死相を見せられているように思えた。何とか復興したいという現地の人々の気力を萎えさせ、くじいてしまいかねない国の怠慢さの方に強い憤りを感じる。

<考察>

最大級の地震による津波の大きさが被害の甚大さとなっているが、今回の被災地岩手を見るかぎり、三陸の地形の特性によるところも大きいと思われる。急峻で狭まった入り江、狭い平地に市街地の形成。大きな津波が特異な地勢地形により勢いを増し強い高波となって押し寄せたことも被害を大きくしたと思われる。

○(小さな集落をのぞき)安易な高台移転にはやはり疑問である。そもそも適地がない。漁業と同じように重要な農業地を浸食する事にならないか?

住むところは高台。職の場は海辺の「街」?は昔どこかで経験し、多いに反省したはずの図式ではないか?

→漁業が重要な産業である三陸沿岸の都市にとって、高台への移転発想は「ニュータウン」の愚を繰り返すことにならないか?

これまで培ってきた生活や産業活動を二の次にした高台移転は「安全」のみをもとめた安易な方策ではないか?「かたわ」の都市では若者も元気がでないし魅力もうまれない。数年後にさらに高齢化がすすみ、新たなゴーストタウンを高台にも平地にもつくりだすことになる。

○「人工地盤」や「津波対応建築」でできる事は街づくりにおいては限界があり、津波が押し寄せたあとの対処療法でしかない。しかし今回も2時間近くあった地震からの「猶予」の間に人命だけでも救うソフト面整備は重要であろう。

<提案>

三陸の地域に昔から住み続けてきた人びとの意思(伝統、願い)をくじかないこと、なぜ過去に被害があってもこの地を離れずこの地で暮らしてきたか?慣れ親しんできた三陸特有の地形/自然環境を生活の再建や経済活動の再生に最大限継承し、活かしていくべきではないか。

<<その為に....>>

- ・安全な街を再生し、従前からの漁業を中心とした産業を復活させ、人々の生活の再生をはかる。
- ・その上で高齢過疎の弱体化した地域社会、弱体の地域経済の活性化をはかる。→厳しい環境(極寒、津波...)、交通不便、狭い土地等...を克服するこの地に即した再生まちづくりを行う。
- ・三陸の美しい自然環境を活かした観光資源の発掘と発展をはかる。

<<具体的にどうするか....>>

- ・街を守る「防波島」を三陸主要各所の沖合に築造する。
- ・今までの場所/元の場所に街を再生、生活の再建をはかる
- ・海の「防波島」を有効活用・ネットワークし、三陸の交通/産業のハブ化により、経済と観光の発展をはかる。

●三陸海岸の特異な地形を活かし、スーパー防波島を沖合各所に築造する[一石四鳥の復興計画]

海の生態系を乱さない沖合のスーパー防波島を計画する。(ただし、自然を冒涇すると大きなしっぺ返しがあるから、そこは慎重さを要する。海のダム化とならないよう。)

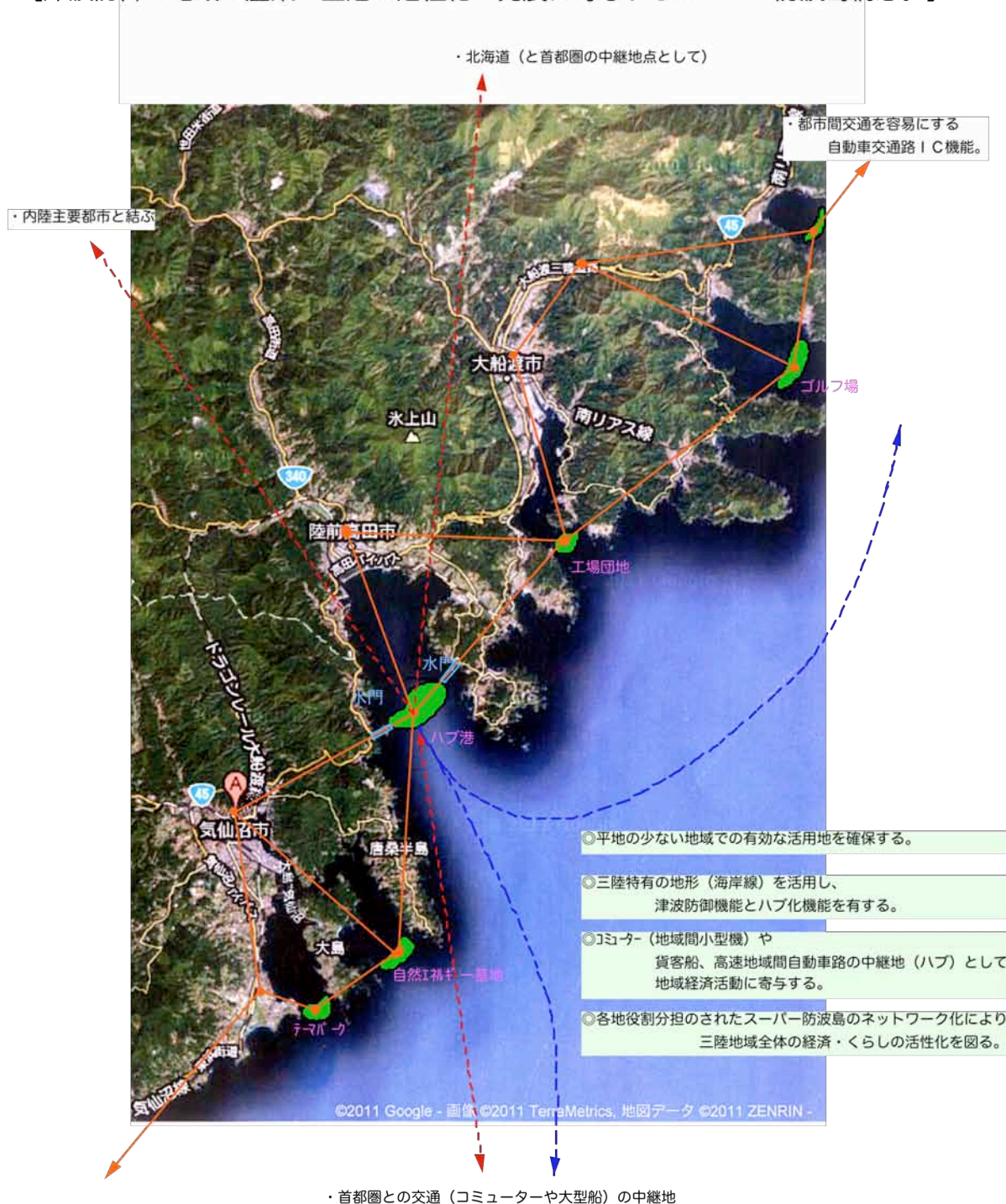
①大津波から、このわずかな平地の市街地を守るため、三陸海岸の特異な地形(入り組んだ海岸線)を巧みに活かしながら、主要な都市の入り江口に島型スーパー防波堤を築造する。②処理に困っているガレキは埋め立てに活用する。防波島の上は都市間自動車交通路中継地やコンピューター飛行場、大型船埠頭、自然エネルギー基地、遊園地、ゴルフ場、工場団地などに活用し、相互に結びネットワーク化をはかる。

③この海域での土木事業は国家事業とし、運営は国内外の投資によっておこなわれ、雇用促進と三陸の

新たな産業／観光の発展に寄与する。④その上で、震災前と同様の地に漁業と観光を中心とした活気ある職住近接の再生街づくりを進める。事業を再建したい意欲ある人々にはすぐにでも被災地に戻ってもらうことができる。

- 陸の被災地では自由な街の復興を可能にし、また地域産業経済にも刺激となり、復活・発展を促す。
 - 被災地域は、都市再生機構URも含めた民間の力を活用する。民間の経済活動にそった活力の導入をはかる。特に被災地の中心部はURが土地を収用し、街づくりの計画、建設、運営は民間に卸していく。
- ◎都市は「1日にしてならず」。役所や企業が街を造るのではなく、そこに暮らす人々が少しずつ街を創っていくものと思う。人々が愛着をもって暮らし、いきいきと働くことができるための基盤づくりが何かを考え、実行することが「公」の役割であるとする。

【津波防御＋地域の産業・生活の活性化・発展に寄与するスーパー防波島構想。】



編集後記

高齢少子化が進行する継続的人口減少地域での復旧・復興の遅れは、生活再建を指向する人々のふるさと離れを誘発する危険がある。目に見える復旧、回復していることがはっきりと判る復興が大切であり、我々もそうした支援活動の一翼を担うようでありたい。

論点1. 津波浸水地域を居住できない区域に指定し、建築制限する方針がでている。三陸地域は海岸線沿いに発展してきた歴史がある。海との共生から市街地が創られ、職住一致・職住近接の生活スタイルを基調として海岸線や山際が拡充され、今日の市街地が形成されている。高齢化と人口減は全国傾向であるが、そこに今回の地震津波、復興方針に職住分離が設定される不思議さ。誰のための、何のための震災復興なのだろう。

論点2. 今回の視察で理解できない光景の一つに、被災地各所に点在する膨大な瓦礫がある。3ヶ月以上が経過して、何故瓦礫が減らないのか。一説には、復興方針とされる高台への集団移転が、瓦礫の現存を招いたとの指摘がある。「復興第1弾事業が予想される高台には瓦礫を置けない」「市街地の嵩上げに瓦礫が必要だから、埋立資材として活用したい」「瓦礫のある低地は復興工程の最後だから、その時点で撤去する」などである。瓦礫の市街地を毎日見つめ続ける被災地の思いを想像するに、こうした市街地風景が住民に与える荒廃感・絶望感に対して、我々はいかなる説明も行い得ない。

論点3. 釜石湾口に浮かぶ巨大な防波堤、基礎部分は最大水深63mの海底に築かれた高さ6m、全長1660m、1200億円の工事費、30年の期間を経て完成した世界一規模の防波堤、一定の津波減衰効果があったとのこと。市街地への浸水被害を防げなかった大船渡湾口防波堤は、老朽化が原因と指摘された。防波堤や防潮堤の再整備には巨費と長い期間が必要である。直ぐに着手すべき生活再建との予算配分が気になる。短期にやるべきこと、中長期でなすべきこと、まちの復興と住宅再建、復興計画決定プロセスへの住民参加も考慮すると、膨大な人材・業務を要する。これらの配分調整、工程計画など、総合的な復興事業として推進していくことに知恵を集めるべきと考える。

————— (藤沢)

東日本大震災 津波被災地(岩手県)視察記録

平成23年6月17日～18日

発行：株式会社 ディーワーク
文章：藤沢毅 新見宏 伊藤明子 新津光人 岡本欣士
前田聖洋 古林真哉
写真：中川直人 伊藤明子 古林真哉
編集：古林真哉 築根広明
発行日：2011年6月30日
